

大池中学校の各学年での人権学習の取り組みについて発表しました。

### 【1年生】障がい者理解について

障がいのある方への合理的配慮を学びました。どのような障がいがあるかによって、必要な支援・生活上の困りごとが異なるということに気づきました。

障がいのある方が困ることとしては、周囲の安全が確認できないことです。例えば、目の見えづらい方にとっては物が置いてある通路は危険です。通路に物を置かずできるだけ広い場所を確保することで、たくさんの方の安全につながるということが分かりました。使用しやすい設備は、スライドドアやフラットな空間です。多機能トイレや優先席などの設備を、必要としている方がいつでも使えるように配慮する必要があることを再確認しました。

他にも、援助や配慮が必要なことを周りに知らせるヘルプマーク、盲人のための国際シンボルマーク、耳マーク、ほじょ犬マーク、身体障がい者マークなどが表す意味やマークを見かけたらするとよいことを学びました。それぞれのマークを理解して、今自分にできることは何か考え、行動に移すことが大切だと思いました。

### 【2年生】部落差別について

勝手な思い込みや偏見によって差別が生まれていくということを学びました。江戸時代には、職業によって身分を分けられ、住むところを制限されたり、村の運営や祭りから除外されたりする部落差別が起きました。生き物の生と死に関わる職業に就く人々を恐れ、排除しようとしたことで、被差別部落の人々は教育を受ける機会や自由を奪われていったのです。

明治時代になり、時の政府は被差別身分を廃止し、職業の自由などを認める布告である解放令を出しましたが、差別が解消されることは無く悪化していきます。解放令反対一揆なども起こり、被差別部落の人々の苦しみは続きました。

学習を終えて、迷信や思い込みが差別につながることを知り、耳に届いた情報をそのまま鵜呑みにせず、本当かどうかを確かめることが大切だと感じました。江戸時代頃からさらに強まっていった差別は今になってもまだなくならないのが現状です。差別をなくすためには、差別をしている人が間違いに気づくことはもちろん、周りの人たちが差別を許さないという感覚を身につけ、立ち上がって社会を変えていくことが必要だと学びました。

### 【3年生】就職差別について

就職するにあたって、自分ではどうにもできない事柄である出身地や性別、家族構成、血液型などが面接の合否の判断材料にされてしまう、という不平等な採用選考が過去にありました。本人の実力とは関係のない事柄を理由に選考が不採用になることがありました。

就職に必要な要素を考える中で、「出身地」や「性別」などに優劣がつくことはおかしいと感じました。実際にそのような「不当な採用選考」を受けた人の話から、「今後、自分が

生きていく中で、そういう場面に遭遇したら、毅然とした態度で対応しよう」という意識を高めることが出来ました。

#### 【学校全体】国際理解

多文化共生について学習しました。世界には、様々な文化や宗教があるため、相手の背景を知らずに言動をしてしまうと、不愉快な思いをしたり困ったりする人達がいることを知りました。例えば、ヒンドゥー教を信仰している人にとって左手は「不浄の手」と言われており、握手や食事に使用しません。このことを知らずに左手で握手を求めてしまうと、相手に不快な思いをさせてしまうことがあるかもしれません。この例をはじめとして、グローバル化が進む社会の中では、相手の立場を尊重するために正しい事実を知ることや、正しく言動にうつすことが大切で、今後も知識を常にアップデートしていく必要があると学びました。

#### 【人権講演会】いじめについて

人権講演会では、吉本興業のお笑いコンビ「オレンジ」の田中さんにお越しいただき、自身が体験した「いじめ」のことについてのお話を伺いました。田中さんは、中学生の頃からいじめにあってきました。その際に、「迷惑をかけたくない」を理由に親にはいじめのことを隠し続けてきたそうです。高校生の頃には、いじめられないようにいじめる側になり、不良グループの使いっ走りになり友達を失うことがあったそうです。また、芸人になってからもいじめにあっていました。「自分はいじられキャラだから」という理由で、誰にも SOS を出すことができませんでした。そのいじめを見ていた当時の相方が助けてくれたおかげでいじめはなくなったそうです。この経験から「悩んでいる人には必ず助けが来るからシグナルを出して」ということを伝えてくださいました。私たち中学生に「いじめる側にもいじめられる側にもならないで」という熱いメッセージを届けてくれました。

人権学習を通して、正しい人権感覚を身につけ、差別を含む様々な人権問題に立ち向かうことが必要だと学びました。「私は当事者ではないから関係ない」のではなく、一人ひとりの人権を守るための行動をしていきたいです。